

本科 3 期 2 月度

解答

Z会東大進学教室

高 1 東大国語



【問題】(演習)

出典：神西清『少年』の一節／センター追試験・改

文章略解

少年が祖母の死を通して「死」を実感していく経緯を、母との関係において記した。少年は、祖母の臨終直前、吠えさかる犬が見ていたものが死だと漠然と感じ取ってはいた。しかし、祖母の死に顔や、死そのものとの接触感、葬儀からは実感できなかつた。

しかし、修業式の日、帰宅した自分に対する母の無感動なあしらいから、自分を甘えさせてくれた祖母の不在を痛感する事で、感謝も伝えることのできない取返しのつかないものとして「死」を実感した。少年は思わず「お祖母さんは？」と口に出した。

解答

問1 ① ばくせん ② うかが ③ けんお ④ ほうび

問2 (a) ① (イ) (b) ② (エ) (c) ③ (オ) (d) ④ (エ)

問3 (イ)

問4 感謝の気持ちを伝えることなく祖母を逝かせてしまったという自責の念に堪えられず、思わず祖母のことを口にしてみたのに、

祖母に甘えることができずに悲しんでいると、母親に勘違いされて動搖した。〔解答例〕

問5 ふと祖母のいない空虚さを、焼けつくように頭の一隅に感じた。〔29字・30～31行目〕

問6

自分の感謝を伝えることのできない取り返しのつかないもの。

〔28字・解答例〕

【問題】(自習)

出典…山本七平『日本人の人生観』／東京経済大学・改

文章略解

「さまよえる」を、目標を失つても静止し得ない状態という意味で捉え、それについて考察した文章。西欧の国の場合、この状態を「過去の歴史的過程から生まれた当然の一時期」と考え、その実態を究明し対処するために、その現状を作りだしている啓蒙主義の本質を探究している。つまり、状態としては「さまよつて」いるわけだが、捉え方・取組方についてはさまよつていないのである。一方日本の場合、その啓蒙主義を「ある一時期を画したある一思想」と受け取れなかつた。つまり永遠普遍の真理を持つ絶対的な権威として受け取つたため、その権威を権威として信じ得なくなつてしまつたときに、信の対象を失い「さまよえる」といった心理状態が生み出されたのである。

解答

- 問1 ①=だせい ②=もさく ③=いつたん ④=けいもう ⑤=かく（した） ⑥=さきやく ⑦=お（し）
⑧=しんとう

問2 (エ) 問3 (ウ) 問4 (ア) 問5 啓蒙主義

問6 それぞれをある特定の一時期に特有なものとして、相対的に受け取るという形。〔36字・解答例〕

問7 (イ)

問2 「自若」は、「泰然自若」というように用いられることがある。「若」は語の下について、「～という様子である」という意を表す

(例……「沃若」よくじやく「みずみずしく美しい様子」・瞳若どうじやく「目を見張るほどあきれたり驚いたりする様子」)。したがって「自若」は、「自づからの様子である」ということから、「もとのままで動かない」「物事に驚かず落ち着いている」の意になる。

問3 空欄Aを含む第一段落を整理してみる。まず冒頭で、筆者は、「さまよえる」日本人という場合の「さまよえる」を、「目的を失つても静止し得ない状態」と定義している。そして、この定義について、「確かに……」以下で、「……いるわけでもない。……かと言ふと、そういうわけでもない。否、むしろ逆であつて、……と言つた状態」が「この『さまよえる』」だと、説明している。

そして、これに対して、「とすると」以下で、「無目的な放浪を当然の状態とする」という意味の「さまよえる」がどうであると言つてゐるのか、がこの設問で問われていることである。つまりここでは、「目的を失つても静止し得ない状態」である「さまよえる」と、「無目的な放浪を当然の状態とする『さまよえる』」の差異を考えればよいことがわかる。ここまで押さえて選択肢を見てみると、「差異」の説明になつていらない(イ)と(エ)は真先にはずせる。残りの(ア)と(ウ)であるが、言つてみれば、(ア)は共通性を積極的に認めており、(ウ)は消極的な類似性の肯定、となろう。「目的を失つても静止し得ない状態」も「無目的な放浪を当然の状態とする」も、「無目的」という部分では一致しているが、共通するものはその一点だけである。従つて、(ウ)が選べよう。

問4 設問に「それは何に類似しているのか」とあることに注意。ここではまず傍線部(b)が何を指すのかを押さえる必要がある。傍線

部直前の主語は「『さまよえる』という状態は」であるが、これは前段落から「イスラエル・アメリカ」を指すことがわかる。したがつて「イスラエルやアメリカの人たちの述べる『さまよえる』という状態」が、何に「表面的に類似しているのか」を考えればいい。(ウ)は問題外。(イ)はこのあたりの文脈を捉え違えている。(エ)では「類似」にも「違う」にもならず、そもそも比較にならない。

問5 傍線部(c)を含む一文の文脈を辿ると、「この思想」＝「永遠普遍の真理を持つ絶対的な権威」であることが擗める。この「永遠普遍の真理を持つ絶対的な権威」はその2行後で、「啓蒙主義を基礎とする輸入の新思想が絶対的権威」と言い換えられている。

）から「この思想」＝「啓蒙主義」の関係が、簡単に擰めるであろう。

問6 直後に「対比することをしなかつた」とあるところから、この指示内容は「対比」の態度に関するものであることがわかる。

「対比」すべき二つのものは「日本の伝統」と「この思想」（＝啓蒙主義）である。まずこの点をおさえること。

次に、直前の「永遠普遍の真理を持つ絶対的な権威として受け取ったため」という表現に注目する。文脈からすればこのために「このような形」にならなかつたということになるのだから、「このような形」とは「永遠普遍の真理を持つ絶対的な権威として受け取」ることは正反対の内容になる。これはちょうど前の段落にあるイスラエルやアメリカの伝統と啓蒙主義の関係の捉え方にあたる。つまり、伝統と啓蒙主義それぞれを「ある特定の一時期」として「いかに位置づけるか」という捉え方である。この内容を上手くまとめればよい。ただ「いかに位置づけるか」では少々大雑把な表現なので、ここは手を加えたい。「永遠普遍の真理を持つ絶対的な権威として受け取」ることは正反対の内容なので、「絶対的」の反対語の「相対的」を用いて、「相対的に受け取る形」とすればすわりがいいだろう。

問7 それぞれの選択肢の語の意味から考えていくといい。(ア)は「あるものを他にもそのままで応用すること」、(イ)は「性質が変わること」、(ウ)は「性質が強まること」、(エ)は「性質が弱まること」の意味である。「超国家主義」から「超戦後主義」へは、一応は変わっているのだから(イ)以外はおかしい。

●
×
毛
●

【問題】（演習）

出典：山崎正和「物神崇拜と動物愛護ののちに」／鹿児島大学

文章略解

近年、喜怒哀樂や個性を示す能力を持つた電子愛玩動物が登場して流行し、犬や猫などの愛玩動物と同様に感情移入され可愛がられる対象となってきた。これは現代人の、他者との関係よりは何かを身近に置いて上から見下ろしたい気持ちや生きたペットを世話する煩わしさの現れだ、との批判も成り立つが、実はこの現象には現代の生命観の変化にも繋がる人間心理の重大な問題を見出だすことができる。自分より小さいもの弱いものに感情移入して可愛いと感じることは特定の文化による人間の能力であって、生命に対してはもちろん、想像力によって人形のような物に対しても生命を感じとる感受性を育んできた。しかし、電子愛玩動物の登場はその区別を搅乱し、生命を持った動物も動かない人形も可愛いと感じないような人間の感情移入能力の萎縮を予想させる。

解答

- 問1 ①＝粹 ②＝巧妙 ③＝修繕 ④＝自尊心 ⑤＝誘発

問2 現代人は、他者との関わりを築くより、上から見下ろして可愛がれる代替物を身近に置きたがるということ。
〔49字・解答例〕

問3 人間が、文化として対象に自分と同質の生命の共感を感じ取り、感情移入すること。
〔38字・解答例〕

問4 本来、人間にとつての人形は、可愛さよりも人間以上に大きい生命の象徴として、恐れたり願をかけたりする物神崇拜の対

問
5

象であつた。その後近代的な自然観が誕生し物神崇拜文化が衰退すると、弱く小さな愛玩動物に対する感情移入が想像力によつて人形にも波及し、人形にも生命を感じ可愛がるという感受性が養われてきた。〔150字・解答例〕

人間は従来、愛玩動物などに感情移入し可愛いと感じる一方、想像力の力で人形のような物も可愛いと感じる感受性の文化を育んできたが、電子愛玩動物の登場で、人間の生命観が変化し感情移入能力が萎縮して、動物と機械との区別を弱くしかねない、ということ。〔120字・解答例〕

【問題】(自習)

出典：西脇順三郎「じゅんさいとすずき」（『西脇順三郎全集』第十巻所収）「春」の冒頭の一節／学習院大学・改

文章略解

老齢の著者が、春を迎えて様々に思いを巡らせている文章である。

人生の第三期に入り人間の死の問題について考えるとき、それはあきらめるより他はないという結論に達するが、その上で、どのようなあきらめ方が美しく、栄光的であるかが問題であると述べられている。しかし、そう言いつつも、人間の死という大きな問題に思いを馳せるより昔の多摩川の春を思い出すことの方が、今生きている自分にとって重大なことだと綴っている。

解答

問1 A ≡ (エ) B ≡ (ア) C ≡ (イ) D ≡ (ウ)

問2 記号 ≡ ①

理由 ≡ ①は自明的道理というような意味で使われているが、その他は自然界の捉という意味で使われているから。〔48字・解答例〕

問3 人間には確実に死が訪れるという事実をわかつていながら、敢えてそれを意識外へ追いやり考えないようにすること。〔解答例〕

問4 多摩川の春の散歩が、死について考えることに対してつまらない。〔30字・解答例〕

問1 空欄に補充する語を考える際のヒントは、空欄の前後にある。まずは、これらの部分をよく読むことから始めよう。

- A** 空欄Aを含む一文にある、「生物として」「嘗む」「生死の神秘」等の言葉がかぎになる。
- B** 空欄の直前の「また」に着目。ここから「美しいか」と「(空欄B)」であるか」が並列関係にあることが判る。死に対するあきらめ方として「美しい」と並列関係に成り得るのは、選択肢の中では「栄光的」しかない。

C 空欄の直前「宇宙の神秘として」に着目。この文章で「宇宙」という言葉を使っているのは、この部分ともう一つ、陶淵明の言葉だけである。彼の言葉の引用の中に「宇宙の永遠性に比較して、」という一節があることから、ここではそれを踏まえたものと考えれば、簡単に(i)が選べただろう。

D 空欄の前に「それも」とあるので空欄Dと同様の事柄がすでに述べられていると想像できる。では何かといえば、この段落で問題になっている「人間の死」である。問2でも問題になっているが、人間の死は「運命」であるので、空欄Dには「運命」と同義語が入ると考えればいいであろう。

問2

傍線部①の「自然の法則」であるが、これは直前の「人間は生命欲～排斥しようとする」を受けている。つまり①は、「自明の道理」のような意味で用いられていると判るであろう。

傍線部②であるが、これは、「人間の死」を「自然の法則」と言っている。人間の死、つまり「自然の掟」である。この掟は人間にとつて「運命」であり、傍線部②の次の行には「人間の死の運命」という言葉がみえる。

傍線部③の「自然の法則」について。これは、直前の「その真実」を受けているが、では「その真実」は何かといえば「生命の終りを意味する死」という現実について、その真実……とあるので、これも傍線部②と同様、人間の死、すなわち「運命」としての「死」を指していると判る。よってこれは、②の「自然の掟」と一致すると判断できる。

さて、この問題は、五つの中から間違っているものを一つ選べばよいのだから、この時点で答えは①だと判る。しかし、思い込みを防ぐためにも、残りの④、⑤も一応検討し、正解が①であることをきちんと確認しておこう。

ちなみに④は「死は自然の法則にすぎない。」とそのものズバリ。⑤も直前の「この問題」が、「自然の法則は何が制定したのか」という、やはり自然の掟についていったものである。

さて、次に、「その理由」、つまり、「内容が異なると判断する理由」を説明せよ、という設問である。記述式問題であるが、このような『相違を指摘する問題』に対する解答の書き方には、定型（＝定石）があるので、記述には手間取ることはないはず。基本的に、「Aは……だが、他は……だから。」という『逆接対比構文』を用い、Aの部分には他と異なる部分を示す記号を当てはめ、Aに続く「……」には、その「A」の部分の持つ『意味』を、後半の「……」の部分には、その他の言葉の持つ『意味』内容を代入すればよいのである。

問3 この問題は「ゞまかす」という表現を、具体的に本文に沿って言い直せば良い。「ゞまかす」とは「その場を取り繕うこと」であるが、何を取り繕うのかといえば、ここでは「死」という現実である。この点をまず押さえること。なお、この「死」であるが、これについては傍線部(a)に対応する傍線直後の一文で、「死の神秘へ、いよいよ近づく、人生の第三期にはいると、……考えたくなる。」と述べているので、「中年期（＝「人生の第二期」と言い換えられよう）」には、「考えないよう」にしていることもつかめる。よつて、「ゞまかす」の直接的、具体的な内容は、「死について考えないようになると」とあると判る。これを解答の中心に据えて、後は「取り繕う」というニュアンスの具体的な説明部分を付け加えればよい。

問4 まず、何がつまらないことなのかと言えば「こんな」とあるので、その直前を指していると判る。したがって前の二段落の内容をまとめればよいことが判ろう。ここに書かれているのは「多摩川の春の散歩」についてである。次に「何に対して」であるが、ここで「つまらない」という言葉の意味をちょっと考えて欲しい。ここでの「つまらない」は「面白い」に対する意味ではなく、「些細なこと」の意味である。従つて、事柄のスケールが問題になるので、「多摩川の春の散歩」という日常個人的なことに対しても、この文章で採り上げられている大きな問題「人間の死について」だと考えればよい。あとはこれらを、設問で指示されている解答形式（＝「何が何に対しても」）に置き換えればよいだけである。

●
×
毛
●

【問題】（演習）

出典：梅原猛『美と倫理の矛盾』／横浜市立大学・04年

文章略解

マルセル・マルソーにパントマイムを習ったテオだが、この二人の演劇は本質的に異なつたものである。マルソーは現実の人間の状況と心理を具現化しようとするが、テオは現実を演じるのではなく、表現されがたい人間存在の秘密や世界の実在を象徴しようとする。テオからみると日本の演劇はすべてリアリズムと捉えられる。テオ自身は実存主義の思想家であり、しかもテオの生活そのものが無から無への連続であり、実存主義の実践なのである。

解答

問1 マルソーはいきいきと現実の人間の状況・心理を具現化し、テオは人間存在の秘密や世界の実在を象徴化した。〔50字・解答例〕

問2 現実の再現を中心とする日本の演劇理念では、人間の神秘を象徴的に表現するテオの演技は理解できないから。〔50字・解答例〕

問3 現実の事件のマネをすることを演劇と考えていること。〔25字・解答例〕

問4 テオの人生の遍歴は、人間の孤独と自由を強調し、人間を謎と考える実存主義を実践したものだと言えるから。〔50字・解答例〕

問5 現実には何一つ生み出さず何一つ残さないということ。〔25字・解答例〕

単なる無の連続で何も生まず何も残さないということ。〔25字・別解例〕

〔25字・別解例〕

問6

テオのマイムと実存主義〔解答例〕
テオの実存主義マイム〔別解例〕

【問題】(自習)

出典：辻井喬『伝統の創造力』／立命館大学A方式・04年

文章略解

【I】文化芸術の伝統とは、その地域に住む人たちが持つていて感性に基礎を持つ、思考の様式、表現の様式、そして美意識である。明治維新以後の日本の芸術論と伝統論との関係は、伝統が根本において否定されるか、国粹主義的思想により歪められ、伝統の復活を主張されるかのどちらかであった。このように文壇における文芸理論が混乱する中、批評の規準が失われ、印象批評や素朴实在論が形成され、事大主義、権威主義という弊害が発生した。

【II】日本の文学は伝統についての曲解と並んで、思想についての無理解という宿痾を抱え込んでいた。そもそも思想と美意識は感性という土壤から分かれ出た二本の幹である。その思想を欠いてきたのが我が国の文学的土壤である、ということを知った上で、伝統論を展開する前提として国際感覚の回復を要求することは、極めて困難なことである。しかし、この回復こそ日本の文化芸術における伝統論の前提であり、伝統を正しく評価、継承していくためにも、度外視することはできない。

解答

問1 ①＝培 ②＝契機

問2 ③＝じょうまん ④＝わいきよく

問3 A＝感性 B＝知識

問4 (4)

問5 美意識であり思想である

問6 (5)

問7 【I】 (7) (3)

問1 ①は「つちかう」「養い育てる」の意の「培」。「倍」と間違えないように注意すること。

②は「きづかけ」という意味の語。

問2 ③は思い上がって横柄であるという意味の語。

④は故意に歪め、曲げるという意味の語。

問3

□A・□Bに入る語は、どちらも第四段落の文脈から日本における啓蒙家たちが頼りとし、武器としたものである。そしてそれらをもとに、倒錯した文学論を唱え、傲慢な主張をしたのである。そこでまず□Bの方から考えてみよう。啓蒙家（人々に新しい知識を与え教え導く人）が頼りとするものは何であろうか。それは、外国文学などに関する「知識」である。第三段落にあるように彼ら（啓蒙家）は思想や美意識をもたず（ということはそれらを生み出す真の感性ももたず）ただ知識を誇るだけであり、それは【II】の第二段落にある感性という土壤をはずした実りのない思想、つまりさまざまな衣裳を彩るだけの「知識」を身にまとっているにすぎないのである。

次に□Aを考えてみよう。こちらは二箇所の空欄となつてるので、そのどちらにも適した語を入れなければならない。初めの方の□Aの下には「響く」という語が続き、しかも、それが「印象批評」という表現で言い換えられている。後の方の□Aの上には「みずみずしい（新鮮で生き生きしている）」という語があり、これらの表現に合う最も適切な語として、【II】の第二段落の中にある「感性」があげられる。ただここで注意しなければならないのは、【I】で用いられている□Aに入る感性は、啓蒙家たちが傲慢な主張をする際の武器としたものであり、【II】の第二段落の初めに述べている思想や美意識を生み出す土壤としての眞の「感性」ではない。日本の文学者が思想性を欠いたまま唯一頼るものとして用いた筆者により「『がつけられた、「感性」でしかない。文中に同じ語が用いられていても、文脈によつてその後のもつニュアンスが異なることに気をつけたい。

問4

□Cはすぐ下の「事大主義」の言い換えである。従つて、この語の意味（定見のない者が勢力の強い者に従い自己保身を図

るうとする考え方)に合うものを選べばよい。

(1)の「暴く」こと、(2)の「取り上げる」こと、(3)の「勢力にする」こと、(5)の「立証する」ことは、語の意味からずれ、(4)の「迎合する」が最も適合する。たとえこの語の意味を知らない場合でも、第五段落で「事大主義」はすぐ下の「権威主義」と並んで置かれているので、この「権威主義」と並べられる選択肢を考えると、やはり答えは(4)となる。

問5 まず傍線部Aの批評について考えてみるとよい。ここで言う批評とは一体何に対する批評なのか。それは日本の文学作品に対する批評である。そして本文は、その批評を行うための基準が失われたという文脈になつていて。これとほぼ同じ内容を述べているのが第三段落中の「いい作品とはどういうことか、それを判定することこそ美意識であり思想であるということは眼をつぶつて見逃されることになった」のことである。この文は別の言い方をすれば、「美意識と思想が良い作品、悪い作品を判定するのに、それらが失われた」となる。

ただ、この問題は問い合わせ方に問題があつたために答えが出づらかったと思われる。この問題のように「批評の基準」となるものは「何か」と問われた場合の解答の文末は普通は体言となる。それがここではどうしても字数制限の条件も含めて答えとなりうる箇所が「美意識であり思想である」しかなく、文末が対応せずひつかかるのである。しかし、いくら解答の形式に対応しないとしても、文脈から割り出した答えがある場合、そちらを優先して答えることが大切である。

問6

D の前までの文脈は、没思想状態に長く低迷してきたわが国で伝統論展開の前提条件である国際感覚の回復を要求することは困難なことである、というものである。この内容を比喩的に表現したのが D なので、それに相当する諺をさがすと、目的に対し手段が違うために、ある結果を望むことを表す(5)が正解となる。

問7

略解でも示したように【I】の文章は、「日本では文化芸術の伝統が正しく評価、継承なされておらず、美意識や思想を持たず、勝手な作品の創造や、批評が行われ、事大主義や権威主義が発生した」という内容である。中心となる論は、自分にしか通用しない印象批評に対する批判で、このことを簡潔に述べているのが(7)である。

【II】の文章の内容は、「わが国における詩、文学には思想性が欠如しており、その没思想状態からぬけることは極めて困難で

あるが、それでもなおその脱出に向けて伝統論を展開する前提として国際感覚を回復する必要性がある』、というものである。そこで中心となる論の主題として(2)と(3)が考えられるが、【Ⅱ】の第三段落の第一文で述べられているのは、国際感覚の回復と伝統論との関係であり、伝統ではない。従つて、(2)にはずれがあるので(3)を選ぶことになる。

L1J

高1東大国語



Z-KAI

会員番号

氏名

不許複製